

# BCS

PRIZE-WINNING WORKS

BCS賞受賞作品探訪記

29

第四三回受賞作品(二〇二〇年)

## 群馬県立館林美術館

前編

二〇二〇(平成三十三年)十月、群馬県館林市に二館目の県立美術館がオープンした。設計は建築家・高橋誠一氏が率いる(株)第一工房。前編では、多々良沼に続く自然味の溢れる場所にプロジェクトがスタートした経緯と、美術館が現在、親しまれている様子の一端を紹介する。

### 美術館の景観が自然と人間の 関わりを表現する

群馬県立館林美術館は、群馬県で二館目の県立美術館として建てられ、一四年目を迎えている。一九七四年に高崎市に開館した群馬県立近代美術館は県の西部地域に位置し、館林市や太田市などの東部地域からは遠く、なかなか足を運ぶことができなかった。そこで、一九八八年に館林市文化協会が美術館建設の請願書を県に提出。県議会では検討の結果、新県立美術館の建設について趣旨採択をした。その後九三年に新県立美術館基本構想検討委員会が設けられ、具体

的な検討が始まった。群馬県立館林美術館について佐々木正直館長は「当館は『自然と人間』をテーマとするエコロジカルな作品を集集・展示するユニークな性格を持つ美術館です。九五年開催の第二回基本構想検討委員会以降、二十一世紀へ向けて、自然と人間との関わり方が改めて問い直される時代に入ったことが意識されていました」と語る。近代美術館と連携しながら、自然との調和や共生、対峙といった関わりを表現した芸術作品を収集・展示する方針がとられている。

そして、訪れてはじめて実感されるのは、このテーマを県立館林美術館の建築と周囲を取り巻く景観そのものが表していることだろう。設計は建築家・高橋誠一氏が代表を務める第一工房に決まった。西欧美術の評論家、美術史家で当時、県立近代美術館館長だった中山公男氏が中心となり基本構想がつくられるなか、敷地を選ぶ段階から建築家が参加するという理想的なカタチでプロジェクトがスタートした。



約200mにわたってゆっくりとカーブを描く1階ギャラリー。構台は芝生広場に向かって開かれ、散策しながら展示室で作品を観るように、ゆったりとした美術体験ができる。左に見える曲面の屋根の建物が第1展示室。



エントランスホールからアプローチとカスケードを眺める。静かに広がる水面越しに秩父の山々や時には富士山も遠望できる。



第2～4展示室まで3つの部屋が繋がっている。企画展示室として年に4回ほど企画展示が開かれる。

「九五年七月に、中山さん、県の関係者の方々と一緒に館林市周辺の候補地を見て歩いて決めました。見渡す限りに草ぼうぼうの荒地でしたが、自然のありさまがこの美術館にふさわしいと思いました」と高橋氏。一帯は多々良沼公園の計画地のなかにあり、戦後食糧増産のために沼の一部を干拓したが、すでに使われなくなっていた土地だった。多々良沼の面積は約八〇畝におよび、白鳥が飛来し、貴重な水生植物や野鳥が集まる自然豊かな場所、現在も公園整備が進められている。

### 散歩しながら美しいものを観るようなギャラリー

群馬県立館林美術館の全景に臨んだときの印象は忘れがたい。すっきりとした空の下、視界の限りに地上に水平に、低く長く、のびやかに美術館が姿を現す。広大な芝生の広がり、樹木、エッジをもった低い建物と水辺が一つになった風景を目の前にすると、一瞬、異次元の世界に滑り込んでしまったような気持ちになる。建築と



西側からエントランスに向かうと浅瀬のようなカスケードが続き、さわやかな水音を響かせている。

もに敷地全体を設計するランドスケープデザインが行われた成果だという。敷地を通り抜けていく園路も用意され、散歩やジョギングをしながら、風景を楽しんでいる人たちの姿も見える。

建物の様子は五〇頁の平面図に見られるように、前面がガラス張りのギャラリー（回廊）が約二〇〇坪、肩のようなやさしいカーブを描きながら芝生広場に向かって開かれていて、来館者はギャラリーを歩きながら途中で設けられた三つ並んだ展示室へ入っていく。ギャラリーを背景に、芝生広場に向かって突き出しているのが中心的な第一展示室である。高橋氏がそこに託したイメージは、巨大な木の葉の陰で動物たちが憩う姿だっ

たという。ちようどボールの曲面を切り取って屋根にし、円錐形を逆さまにした斜めの壁がそれを支えているような空間である。前面を覆うガラスの上部を傾け、軒先も斜めに迫り上がって、芝生広場に向けてダイナミックに開かれているのが印象的だ。ここでは国内外の近現代彫刻を中心に展示が行われ、なかでもおよそ一〇〇年前

に活動したフランスの彫刻家、フランソワ・ポンポンの作品、「シロクマ」に会える場所として、大きな人気を呼んでいる。群馬県立館林美術館が自然と人間のテーマに関連して収集してきたポンポンの作品や資料は日本国内では最大で、動物彫刻は洗練された美しいフォルムが子供から大人まで幅広い年齢層の人たちに愛されている。さらにポンポンの出身地の農家を再現した建物も別館としてギャラリーの東側に建てられ、内部にワークショップ室も設けられている。ガラス張りのギャラリーとは対照的な木や煉瓦などの雰囲気があり、憩いの場として親しまれている。

### 建築主より

この美術館を大切にしたいと思う  
スタッフ日々の活動を支えています



群馬県立館林美術館館長  
佐々木正直 Masunao Susaki

館長になって三年目です。当館は、県民が等しく美術鑑賞の機会をもつことができるようにと設けられました。

昨年度、来館者の方々にアンケートに答えていただいた結果を見ると、当館について小学生から高齢者の方まで、幅広い年齢の方々が嬉しいコメントが寄せられています。建物が美しくすばらしい、環境・景観がすばらしい、居心地が良かった、清潔だという方が多く、再び来てみたいという方も目立ちます。建物が魅力的で、さら

にこのように言っていただけなのは、維持管理にあたる職員、サービスマンで受付業務や作品監視の仕事についている監視員やスタッフ、清掃管理に携わっている方たちが一生懸命に仕事をされているおかげだと強く感じます。また、群馬県は早い時期から公共建築の設計を建築家に数多く依頼していることもあって、建物を大事にしようという意識が職員の間浸透しているようです。

これまで年四回の企画展を開いていますが、今後も「自然と人間の関わり」のテーマを幅広くとらえ、様々な展示会をバランス良く行っていきたいと考えています。一方で将来リーダーとなる子どもたちに来てもらえる美術館をつくることも大切です。学校の授業の一環として来館していただいたり、こちらから学芸員が学校に向き、美術に親しんでもらえるような活動を積極的に行っています。

### 設計者より

もう一度訪れたいという感想は  
建築家としてうれしい限りです



株式会社第二工房  
高橋 一 Teichi Takahashi

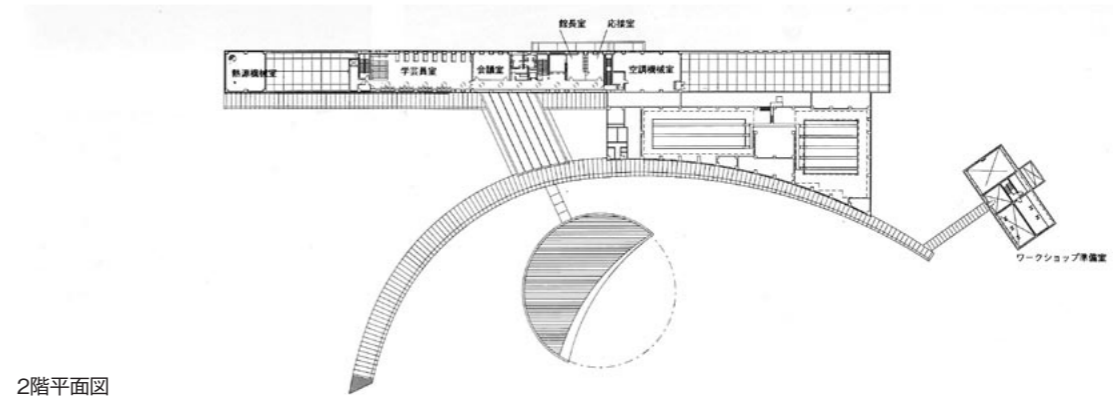
土地を選択し、環境を把握したうえで、どのような建築をつくるかを考えるのが本来のあり方ですが、現実にはなかなか難しいことです。館林美術館のように条件が揃うことはそうはないでしょう。

自然とのつながりのなかで建築がどこまで自然の中へ入っていけるか、それが実現できていけば、つくり手にとっても、使う人にとっても幸せなことだと思います。

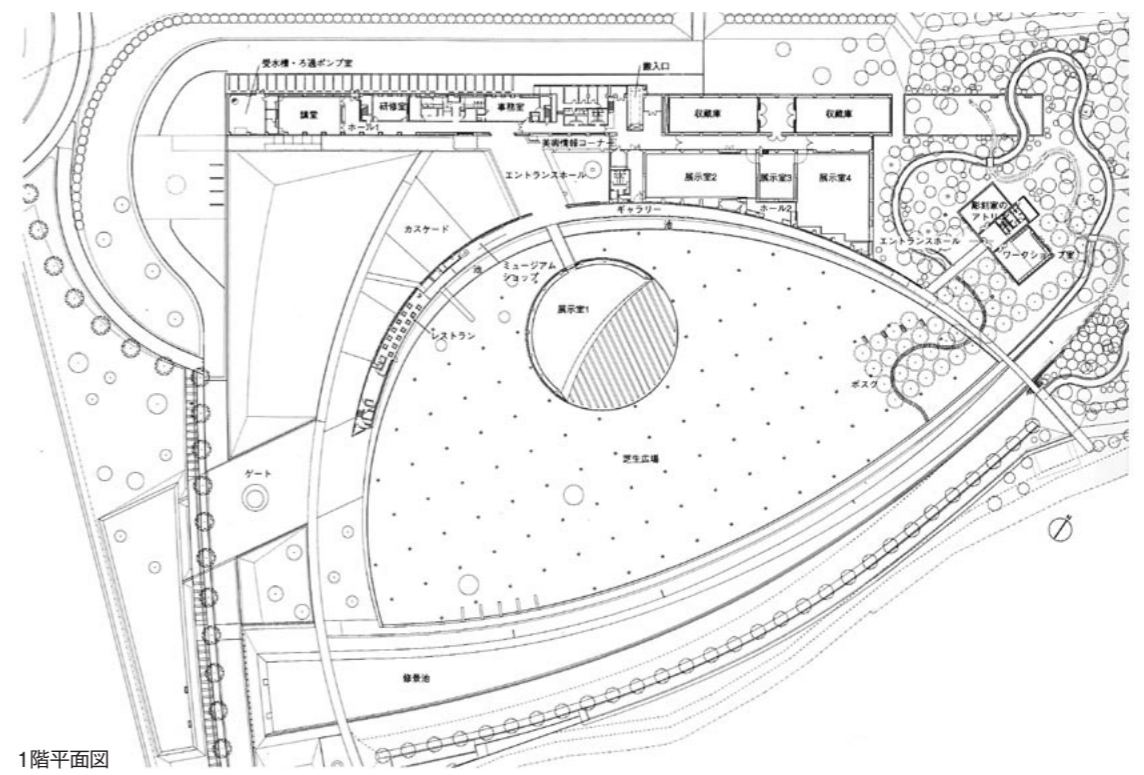
コンペの結果、この美術館の設計の機会をいただきました。一九九五年七月から群馬県立近代美術

館の中山公男館長以下県の関係者と一緒に館林市周辺の候補地を見て歩くという、大変画期的なことをして土地を選定しました。そして、中山館長とは敷地を見て回るうちに打ち解け、中山館長の美術に対する考えをお聞きすることができました。また、建築についても理解があったため、のびのびと設計ができるシチュエーションを組んでいただきました。

ものをつくるときには最初から全てが決まっているわけではありません。つくっている最中は、例えば一字一画積み重ねて小説を書くようなものですが、建築は簡単につくり直せませんが責任も大きい。彫刻や絵を観に来た人たちに、また来たいねと言っていただいたり、そこから観る景色もいろいろ、こちらから観るほうがいかなどと言われるようになったら、建築家として嬉しい限り。本当にうきうきした気分になりますね。



2階平面図



1階平面図

### 群馬県立館林美術館

東武伊勢崎線多々良駅から徒歩20分  
 東武伊勢崎線館林駅東口からタクシー、またはバス「多々良巡回線」あり 「県立館林美術館前」下車すぐ



#### 計画概要

- 所在地：群馬県館林市日向町2003
- 建築主：群馬県、館林市
- 設計者：株式会社第一工房
- 施工者：株式会社大林組、河本工業株式会社、りんかい建設株式会社
- 竣工：2001年3月
- 敷地面積：74,918.00㎡
- 建築面積：5,742.85㎡
- 延床面積：6,856.47㎡
- 構造：鉄筋コンクリート造、一部鉄骨鉄筋コンクリート、鉄骨造
- 規模：地上2階